

箱の外に出て考える

崔 ナレ

東洋大学

今回「薫風」の執筆の機会をいただきありがとうございます。現在、東洋大学理工学部建築学科で助教として勤務しております。高校生まで韓国で過ごし、建築という生活基盤に関わり、人々の幸福や生活の質の向上に貢献したいと思い、2003年に大阪大学に留学しました。建築学は、当時の私が想像していたよりも多様な分野で構成されており、その中でも恩師の建築環境に関する講義を受講してから室内環境に興味を持つようになりました。現在は、置換換気をベースとした「高効率換気方式に関する研究」と、学習空間や休憩空間の「室内環境が在室者の心理・生理・知的生産性に与える影響に関する研究」を行っています。

さて、コロナ後に登山を始めた人が増えたと言われますが、私もそのうちの一人です。2020年年末に期せずして訪れた熊野古道で山歩きに目覚め、毎年少しずつルートを変えて年末に熊野古道を歩くことが恒例行事になりました。熊野古道は熊野大社までの巡礼の道でいくつかの山を越えて行きます。見渡す限り山並みの景色を見たり、湿った苔の森の中を歩くと、自然に囲まれ包まれ、心が穏やかに解放されるのを感じます。人間は自然との繋がりを求めるというバイオフィリア理論（Biophilia Hypothesis）や自然が精神を回復させるという注意回復理論（Attention Restorative Theory）のように、自然に触れるとその大切さを実感します。一方、室内環境は自然環境と真逆の存在であるため、別の観点で考える良い機会にもなります。人間は、臭い、うるさい、暗い、暑いなど不快と感じた時に室内環境要素を強く認識します。そのため、不快になりうる要素が打ち消された、例えば静音で無臭の、特徴のない室内環境が望ましいと以前は考えておりました。しかし、変化に富んだ自然に触れるようになってからは、五感を、人を、良い意味で刺激することができる感覚を大切に、人の根源的な心理・生理にアクティブに働きかける室内環境についても考えるようになりました。自然を取り入れることに加えて、快（pleasant）な室内環境要素について探索し、人々に幸福感、充実感、休息感を与える室内環境についても研究していきたいと考えています。



熊野古道の百間ぐら



日光白根山の五色沼